

九 伊藤先生父子の靈に捧ぐ（遺稿其二）

——日本最初の混凝土造寺院創始者——

明治四十年の大火で、その莊嚴善美を極めたる大谷派本願寺函館別院の大伽藍は、ひとたまりもなく焼盡された。

函館は世間周知の如く大火の都市で、この大谷派函館別院も創設以來、屢々宿痾に遭會し、そのたびごとに再建が繰返された。これ等宗教的大建築が無抵抗的に燒盡することは、宗教信念を阻むことの大なる、災害を増大して市街が經濟的致命傷を受け、ひいては産業文化の發展を著しく阻止せらる、これ誠に忍び難いことである。

大谷派函館別院が、四十年に燒失後再建に際し、時の理事者は、何とか燃えない御本堂をと、非常に苦慮せられた。

然るに當時我國に於ては、殿堂建築は勿論、一般の建築物も未だ混凝土造りのものは極めて稀で、一般には混凝土建築が非常に疑はれて居つた。

斯様に今から二十五年も昔の時代に、我國でも有數な彼の大伽藍を全部混凝土造とする計劃は、随分無

謀視せられたのであつた。

設計及請負は、帝室技藝員で且つ大谷派本願寺御本山の工事者である當代の巨匠、名古屋の伊藤平左衛門先生父子で、工事の施工萬般を引受けたのが自分であつた。

工事着手は明治四十四年夏。完成は大正三年冬。恰度三十ヶ月を要した次第であるが、未だ鐵筋混凝土の眞價が認められず、これに従事する職人技術者に至るまで、全く最初の工事であり、従つて工事中に於て随分種々なる困難にも遇ひ、また、抱腹絶倒する滑稽事も澤山あつた。

基礎工事中は信徒の善男善女方も非常に勢よく、毎日奉仕勞務が盛んであつたが、混凝土打ちが段々進工して、床上に達する時分から、混凝土造りの御堂は反對だと云ふ聲が追々勢を得て、混凝土打ちが軒端位に達した時は、一度に寄附金の納入がなくなつた。

斯くなつては、工事上にも大支障を來たすので、當時者の心配困惑は想像以上であつた。

その反對の理由とするところは、

一、御堂の主體構造を爲す混凝土は、もとく、俗人凡夫の踏付ける不淨の地面から採集したもので、

この不淨の材料を以て造る御堂へは、大切なる御佛、祖先の靈を祭ることは出來ない。

二、御堂の御建立は大材の柱虹梁を以て、長年月を要して切組み建立せらるべきものであるにも不拘、

纖弱なる鐵棒と鋸肌の枠に依つて、泥土に等しき不淨極まる混凝土を流し込みて造るので、その脆弱

さは解り切つて居る。何時崩壊するかも知れぬ。朝夕三百六十五日、禮拜する自身の生命にも危険である。

三、木の香馨しかるべき新御堂が、その眞髓から仕上げまで、えたいの解らぬ泥作工では、御佛様御先祖様に對し何共申譯がない。

これ等の理由のもとに、工事はこれからといふ大切な時期に、寄附金が中絶しかけたのであるから、これは容易ならざること、絶體絶命、何とか茲に混凝土の眞價を徹底せしめなければならぬことになつた。

そこで、種々なる案も出たが、結局、この工事中の御堂の中に出来るだけ多くの人を集め、而して出来るだけ大騒ぎをさせて、いかに混凝土が堅牢であるかといふことを知つて貰ひ、同時に各部の仕上り見本を澤山陳列して、而もその出来上りが、いかに莊嚴優美になるかを認識させることであつた。

楮て、この多くの人を集め大騒ぎをして貰ふ手段であるが、これが普通手段では、反對の向きは勿論、大勢の參集も困難だと云ふので、未だ形體をなさぬのに上棟式と名づけ、その工事中端の混凝土のそこそこへ、當時流行のイルミネーションを施し、晝は上棟式修行、夜は大餘興を催すといふことにしたのであつた。

而して、これが宣傳に、函館美妓の總出動となり、晝はこの美妓の假裝で市中を練り廻り、夜は工事中

の新御堂で大餘興。それに酒あり肴ありといふ仕組で、大々的な人寄せ手段を爲し、その大衆の前で混凝土の效能を述べ立て、御堂がいかん堅牢優美であるかを徹底せしむると云ふ。この所作事にも等しき滑稽事を行ひつゝ、寄附金納入の圓滑を計り、當時の混凝土反對を押し切つたのである。

斯様な困難と闘ひつゝ完成せられたる彼の混凝土の大伽藍は、その後數度の大火にも嚴然として耐火の威力を現し、完全なる安全郷となりて、災害のたびごとに多數の人命を救ひ、財寶を守護して、混凝土の萬能時代を現出せしめたるを思へば、今より二十五年前、日本最初の寺院建築は、社會的にも技術的にも最も尊い試練であつた。

其後、この混凝土建築がいかん有效なるものか一般も知り、技術者間に於ては不斷の研究を續け、現在我國各地に於て竣工せる寺院も非常に數多くなつた。

北海道に於て、當組の施工せるものゝみでも、東本願寺御廟、東本願寺御茶所、函館稱名寺等あり、その後も益々増加されんとする傾向あることは誠に喜ばしき次第である。

(昭和十二年五月、北海道樺太寺院大鑑に寄稿のため、札幌滞在中に執筆)